

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K14035

研究課題名（和文）「続き物語」による学びの内実の検証と、それを組み込んだ「読むこと」の単元の開発

研究課題名（英文）Research on learning effects of "Finish the Story Activities", and developments of learning unit integrating the activities

研究代表者

八木 雄一郎 (Yagi, Yuichiro)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：80571322

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：小学校・中学校・高等学校の国語科の授業の中で「物語の続きを書く」という言語活動がもたらす学習効果について研究を行った。具体的に行った調査・検証は以下の通りである。他の言語活動と比較して「続き物語」にはどのような独自性があるのか、その概念について再検証を施した。「続き物語」がどのように「読むこと」の学習を促進するのか、中学生や大学生による実際の取り組みを通して分析した。「続き物語」を「読むこと」の単元の中にどのように組み込むべきか、授業研究を通して検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「続き物語」の先行実践は複数あるが、その方法や意義についてはいずれも実践家としての暗黙知的な経験則から導かれているところがあり、学術的な議論に基礎を置いたものではなかった。それに対し、本研究は「続き物語」の有効性や学習効果について客観的に証明しようとしたところに学術的意義がある。さらに本研究を通して、どのような教材が「続き物語」を行うのに適しており、それをどのように採り入れると「読むこと」の授業・単元が活性化するのかについて具体的に示した。全国の国語教師が授業構想をする上で、誰もが参照しうる有益な指針を提供した点で社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：I conducted research on learning effects of "Finish the Story Activities" in Japanese class of elementary school, junior high school, and high school. In particular, Confirmed the concept of "Finish the Story Activities" comparing other language activities. Analyzed how "Finish the Story Activities" facilitates learnings of literature reading through actual works by junior high school students and college students. Verified how "Finish the Story Activities" should be integrated in the learning unit of literature reading through demo lessons.

研究分野：国語科教育学

キーワード：続き物語 翻案 読むこと 書くこと 方法知 アクティブラーニング コンピテンシー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「アクティブラーニング」の重要性が盛んに提唱されるようになってきた中で、国語科においてもたとえば「物語を書く」というアクティブな言語活動の意義が再注目されつつあった時期に本研究は構想された。本研究が着目した「続き物語」(物語の続きを書く活動)は、素朴な物語創作では設定などをゼロから構想する負荷が多分にかかるリスクが伴うのに対し、原典(物語教材)の内容や形式を踏襲することができるので、よりスムーズに学習者をアクティブな学びへと導くことがその独自の可能性として期待されるものであった。しかし「続き物語」は、すでにその活動は教科書にも掲載されており広く認知されている一方で、それが持つ独自の目的、内容、方法については明瞭な定義づけがなされているとは言えない状態にあった。「続き物語」という活動とは「どのような学びがもたらされるのかを目指して」「どのような教材で」「どのような課題を課し」「どのような授業および単元の展開の中で活動を行うべきなのか」といったことについてのまとまった知見が十分に提供されていないのが研究開始当初の現状だったのである。

2. 研究の目的

本研究は以下の3点をその目的として設定した。

「続き物語」概念の検証と定立

「続き物語」は、先述の通り今日の教科書にも活動例として掲載されている他、大村(1983)や青木(1986)による実践などもあり、一見人口に膾炙した活動のように思われる。しかし実際には国語科教育学の辞典や用語集において見出し語として掲載されている例は確認できておらず、その概念が用語として確立・定着しているとはいえないのが現状である。そこで、大正期以降の「表現理解一体指導」の蓄積について、その整理と再検証を行い、その系譜と体系における「続き物語」の位置を明らかにする。さらに「書き換え」「リライト」「翻作法」など、「読むこと」と「書くこと」とを連関させた近年の実践群には「続き物語」との近似性が見出せる。それらとの共通点、相違点の検証を通して「続き物語」概念の定立を図る。

「続き物語」による学習促進効果の分析

「続き物語」を書くことによって文学的文章についての読解や鑑賞はどのように変容していくのか、そしてその変容は「学び」としてどのように評価しうるのかについて、児童生徒たちの授業内の活動や、ワークシート・制作物などから分析する。この分析についてはすでに着手しており、予備調査として申請者が非常勤講師を務める看護学校の学生に『星の花が降るころに』の「続き物語」を書かせ「交流」させた結果、学習者たちが作品の重層的な主題に接近していく傾向があることを指摘した。すなわち、1回目の「続き物語」では表層的な「友情物語」として作品を解釈していた学習者の多くが、交流の結果、示唆的に表現されている「恋愛物語」としての要素に気づき、その要素を2回目の「続き物語」に付加していくという傾向が認められるのである。(八木(2016))。この結果をふまえ、小学校、中学校における学習の実態を明らかにしていく。

「続き物語」を組み込んだ授業・単元モデルの開発(小学校および中学校)

「続き物語」の活動が有効に機能し、その導入によって学習を促進させることができるようになるための模範となるような単元モデルの開発を行う。

3. 研究の方法

本研究は以下の4点をその方法として展開した。

文献研究(通時的)・・・大正期以降の「表現理解一体指導」の系譜・体系についての整理と再検証

文献研究(共時的)・・・「書き換え」「翻作法」などの方法論と「続き物語」との共通点、相違点の検証

実証研究(分析的)・・・「続き物語」の「読むこと」の学習における有効性について、児童・生徒たちのワークシートや制作物の分析

実践研究(開発的)・・・実際の小学校、中学校において「読むこと」の単元に「続き物語」を組み込む際に有効な方法の検証および単元モデルの開発

4. 研究成果

本研究は以下の2点において成果を得ることができた。

『星の花が降るころに』(光村図書・中学1年所収)の「続き物語」について、中学1年生が書いた作品と大人(看護学校生)が書いた作品とを比較分析した結果として、大人の方が原作中に明示されていないメッセージやテーマを早い段階から自身の作中で言語化して表象することができる一方で、中学生は明示されている要素のみを中心に書く傾向があることがわかった。しかし「続き物語」を中学生たちが読み合い2回目を書くと、1回目にして着実に明示されていない内容に言及するようになっていく様子が見て取れた。ここから「続

き物語」は、生徒たちが自力で原作の核心的な部分（主題）に接近していくことを促す効果がある活動であることが示唆された。

「続き物語」の活動を組み込んだ『星の花が降るころに』の単元を中学校で実施し、その意義や採り入れ方について検証を行った。意義としては、「続き物語」を設定することで作品を読む上での課題が生徒たちの言葉から生まれ、主体的に作品に向き合おうという意識を喚起する契機となることであり、また「続き物語」それ自体が、生徒たちの読みの変容を刺激する要因として大きく寄与することである。一方、採り入れ方については、文体や表現技法を生徒たちとともに丁寧におさえながら「続き物語」の活動を行っていくことの必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 島田俊哉・八木雄一郎	4. 巻 14
2. 論文標題 諸本比較を採り入れた『平家物語』の授業実践 高野本・延慶本の比較を通して「扇的」を読む（中学校第2学年）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 272-285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 島田俊哉・八木雄一郎	4. 巻 13
2. 論文標題 文学的文章の学習指導における「続き物語」の採り入れ方 「星の花が降るころに」（光村図書・中学校第1学年）の実践から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 154-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 龍野直人・八木雄一郎	4. 巻 13
2. 論文標題 作文への意欲を高めるための「取材」活動のあり方 「自己PR文」を書く単元（小学校第5学年）を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 166-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 八木雄一郎
2. 発表標題 「続き物語」の創作と交流がもたらす学び～中学生作品の傾向から～
3. 学会等名 信州大学国語教育学会第27回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉田監修、塚田・甲斐・長田編、八木他著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 197
3. 書名 『初等国語科教育』（八木は第6章「伝統的な言語文化」を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------